



「社会性」を育むには？！

夏休み中に、茅ヶ崎市教育センター主催の響き合いシンポジウムに参加しました。今日は、そこで講師を務められた「東京大学 遠藤利彦先生」のお話を、僕なりにまとめてお伝えしたいと思います。

はじめ遠藤先生は、ヒトは、生涯を通して「子どもっぽい」とおっしゃられました。それは、人間が進化の過程で、子どもっぽい性質を強めてきた、つまり身体的な攻撃力や防衛力を弱化する方向に進化し、同時に他の生き物なら当然成長とともに強まっていく、攻撃性・猜疑心・警戒心といった心を弱めてきたのだということでした。

「子どもっぽい心」をもつということに何か意味があるのでしょうか。それは、容易に他者と仲良くなれるということ、他者と関係や集団を作れるということなのだそうです。人は、単体としては極めて弱いですが、群れや集団をなすと俄然強いという特性があります。いわば、一人一人の強さを捨てて、集団としての強みを獲得してきたということです。それとともに、自他信頼や心の理解、共感、思いやり、道徳性といった心の働きを強めてきたわけです。

人の強みがそういった「社会性」であるならば、それを豊かに身につけさせることが発達の究極の目標と言ってもよいのかもしれませんが。では、どのように「社会性」を育めばよいのか、気になるところです。

先生のお話では、子どもは生まれながらにして社会的なのだそうです。人の赤ちゃんは、「する」をきらい、「公平」「公正」を当たり前のことと考えたり、意地悪を嫌い、親切を好んだり、悪いことをした人を罰すること好んだりすると、発達心理学者ポール・ブルームの「ジャスト・ベイビー」には示されています。また、マックス・プランク進化人類学研究所名誉所長マイケル・トマセロの「ヒトはなぜ協力するのか」では、人間はよき心をもって生まれてくる、善なる心・仁なる心をもともと持っているとしています。しかし、善なる大人になれるかということ、必ずしもそうではないということは、自分たちの社会を見渡せば、はっきりと分かります。

「アタッチメント(愛着)」と言って、子どもは、容易に怖がる、不安がる存在であり、泣きながら身近な誰かにくっつくこうとし、くっついて、安全感、安心感に浸ろうとするといった心理行動的な傾向を表す言葉があります。この「アタッチメン

ト」で、困っているときに受け入れてもらえる、助けられてくれるということ、いかに確実に安定して経験できるかが、どんな大人になるのかを左右するのだということでした。そしてこの「アタッチメント」は、人間の強みである「社会性」を支えるのだそうです。具体的には、以下の三点です。

- 「自己」にかかわる心の性質
自分を大切に、適切にコントロールし、もっと高めようとする力
- 「社会性」にかかわる心の性質
集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力
- 両側面にかかわる「感情の制御・調整」

では、私たちは子どもたちとどのように接していけばよいのでしょうか。それは、しっかりとアタッチメント対象となって、2つの役割を担うことです。

- ① 「安全な避難所」としての役割
 - 子どもの崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止め、その子どもの心を言葉を通して映し出すこと(さみしかったね。いたかったね。等)
→心の理解や共感性、思いやりにつながる
 - 子どもの崩れた感情を無条件に受け入れ、立て直し、安心感を回復させること
→自分は愛してもらえる価値がある、人って信じていいんだという感覚とともに、何かあったらここに来ればよいという見通しをもてるようになる
 - ② 「安心の基地」としての役割
 - 安心感を得て、元気になった子どもの背中を押して、また一人で探索や冒険に向かっていけるよう応援し、見守ること
→自発性や主体性、自己効力感等をもてるようになり、探索を通した「学び」につながる
- 子どもたちは、いつでも保護してもらえるとの確かな見通しに支えられ、安心の基地から自発的な探索・遊びに出かけます。そして、危機との遭遇(恐れ・不安・欲求不満等のネガティブな情動経験)があると、安全な避難所に戻ってきます。出かけて、もどって、また出かけてと輪のように行ったり戻ったりするので、これを「安心感の輪」と呼びます。

僕たちは、子どもたちに安全感・安心感の基盤、「安心感の輪」をしっかりと形成していかねばなりません。その輪を行き来し、その度ごと僕たちから適切なケアを受ける中で、「社会性」の心の力は育まれるのです。日々の子育ての中で、少しでも意識していきたいものです。